

「特集・アーキテクチャ」に寄せて

東浩紀

「アーキテクチャ」には、建築、社会設計、そしてコンピュータ・システムの三つの意味がある。



この言葉は近年、批評的な言説の焦点として急速に前景化している。わたしたちは、イデオロギーではなく、アーキテクチャに支配された世界に生きている。したがって、必要なのは、イデオロギー批判ではなくアーキテクチャ批判である。だとすれば、わたしたちはアーキテクチャの権力にどのような態度を取るべきなのか。よりよきアーキテクチャなるものがあるとすれば、その「よさ」の基準はなんなのか。そもそも社会を設計するとはなにを意味しているのか。イデオロ

ギーが失効し、批評の足場が揺らいでいるいま、それらの問いはあらゆる書き手／作り手に喫緊のものとして突きつけられている。

今号の『思想地図』は、それらの問題を、領域横断的に検討するべく編まれた特集号である。

まずは、浅田彰、磯崎新、宇野常寛、濱野智史、宮台真司の五氏を招いて行われたシンポジウムが、今後の議論がそのうえに展開するであろう新しい「場」、いわばアーキテクチャ論のアーキテクチャを創り出すものとして収録されている。多岐に亘った討論は多面的な読みを誘発するはずだが、とりわけ司会者として印象的だったのは、そこで磯崎と濱野という、専門も異なれば世代も遠く離れた二人のあいだで対話が始まりかけていたことである。『思想地図』はつねにそのような、本来ならば起こるはずのない出会い、一種の知的誤配が起こる場でありたい。なお濱野の問題意識は、前号掲載の論文から連続している。併せて読まれるとよいだろう。

今号には続いて、ほぼ同世代の若い建築家、社会学者、そして法学者による三つの論文が収められている。それらはすべて、さきほど掲げた問い、「わたしたちはアーキテクチャの権力にどのような態度を取るべきなのか」という疑問への

回答として読むことができる。よりよきアーキテクチャを目指して大胆にも「批判的工学主義」を掲げる藤村龍至、労働問題を起点にアーキテクチャと実存の切実な関係に迫る鈴木謙介、そして繊細かつ冷徹な思考のはてにアーキテクチャによる統治を肯定する安藤馨。これら三つの論文はいずれもたいへん刺激的なので、ここで屋上屋を架す必要はあるまい。

特集にはほか、円城塔による書き下ろしの小説と、北田暁大・原武史両氏との鼎談を収めた。アーキテクチャの特集にあたりなぜ創作を掲載するべきだと考えたのか、そしてそこでなぜ円城に依頼したのか、そのあたりの事情は円城作品のまえにあらためて記している。そちらを読みたい。

他方で原を招いての鼎談は、ともすれば抽象的な原理論に傾きがちの今号の特集に、具体的な都市論、郊外論との接点を導き入れるものとして行われた。わたしたちは特定のアーキテクチャのなかに住まう——それはまず第一に、住居の、そして土地の問題なのではないか。責任編集の二人はそのような視点から、共著『東京から考える』の問題をあらためて考えなおす機会を得た。



最後に特集外の二つの原稿に触れておこう。

特別掲載の福岡亮大による論文は、彼の文学観や社会観が凝縮され示された傑作。多くの読者にはまず、村上春樹と同人ゲームを並べ、「偽史」というキーワードで括ったことが注目されるだろうが、この論文の真の価値は事例にはなく、従来の文化批評とはまったく異なった原理、異なった概念系を用いて行われる彼独自の手法のほうにある。この論文で投げかけられた問題は、次号特集でふたたび追求される予定だ。

もうひとつ掲載されているのは、編者と宮台真司の講演旅行をめぐる河野至恩による報告。旅行の内実は報告のとおりだが、なぜそれがここに掲載されているかといえば、それはむしろ次号以降の展開と深く関係している。しかし、その点については、まだ乞うご期待とだけ述べておこう。いずれにせよ『思想地図』は、今後ますます多くの知的誤配を起こすべく、攻撃的かつ積極的かつ大胆に批評の前線を切り拓いていくつもりだ。

■
『思想地図』三二号の世界へようこそ！